



沖縄県与那国島 浦野墓地

この世の家、あの世の家

－現代日本のお墓選びにみる「いい墓」の基準とは－

東北大学大学院文学研究科 文化人類学専修

越智郁乃

本日の講演内容

1、文化人類学とは

- (1) 文化とは、人類学とは
- (2) フィールドワーク：文化人類学的な考え方、資料の集め方

2、儀礼の重要性

- (1) 節目と通過儀礼
- (2) 死者儀礼と祖先祭祀

3、いいお墓を探して

- (1) お墓の引っ越し
- (2) 都市の樹木葬

4、あの世の家、この世の家：現代のお墓選びにみる死生観

1、文化人類学とは

(1) 文化とは、人類学とは

文化人類学 (英語) Cultural Anthropology

culture + *anthropology*

文化 + 人類学

anthropos + *logos*

ヒト + 研究

→文化人類学=文化という側面から人間について探求する学問

文化とは・・・？

⇒ (答え)

引用：川口幸大『ようこそ文化人類学へ 異文化をフィールドワークする君たちに』昭和堂 2017年

文化と伝統の違いは？

[伝統] ある民族や社会・団体が長い歴史を通じて培い、伝えて来た信仰・風俗・制度・思想・学問・芸術など。
特にそれらの中心をなす精神的在り方。 [広辞苑より]

- 「伝統」と「文化」は日本の習慣を説明するときに使われ、長く伝えられてきたことに重点が置かれがちだが、「培ってきた」ということは「作り出してきた」という意味も含む。
- 文化は生き物のようにたえず変化していくものであって、決して静的、固定的に捉えることはできない。「純粹」「伝統」という言葉で説明しようとしても、変化していく中の一瞬にすぎない。

(2) フィールドワーク： 文化人類学的な考え方、資料の集め方

フィールドワーク：

- 研究者自身が現地に行っておこなう実地調査
(英) field…[名詞] 野, 野原, 牧草地；
田, 畑, 田畑, 農場；
(空・海・雪などの) 一面の広がり；((the ~s))田野, 田園
→研究対象を示す

フィールドワークを行う研究分野：

- 地質学、動物学、植物学、社会学、政治学、…

文化人類学的フィールドワーク

文化人類学的フィールドワークとは

- ① 単独で
- ② 1~2年、あるいはそれ以上にわたって現地に住み込み
- ③ 現地言語の習得に努めながら現地調査をすること

文化人類学的資料

- ① 現地の人々の行動の観察 = 参与観察 (さんよかんさつ)
- ② 人類学者に話をしてくれる人 (= インフォーマント) の話し

⇒ 文献だけではなく、対象となる場所に出向き、対象となる地域の言語をおぼえて、そこに暮らす人と何かしら一緒に行動したり会話したりしながら、生活の内側から「文化」について考える。

「違うこと」と「同じこと」への注目

- **人類学者が調査する様々な項目：**

家族、結婚、性的役割、宗教、儀礼、・・・

⇒文化は、国や地域で違っていることは当たり前。でも似たようなことをしているのが人間。

現地の「当たり前」を言語化

現地に住む人の「文化」＝当たり前

- フィールドワーカー（よそ者）にとっての 現地文化＝奇妙なもの

→現地の人にとっては空気のような文化はなかなか表現できない

外部者の視点から文化を言葉にし、伝える→異文化理解

⇒「よそ者」であることが重要

日本はフィールドになる？

- 均質なように見えて南北に広い日本は実は多様。また「自文化」と思っているところにも自分の知らない「異文化」が隠されている。

⇒新学際領域「日本学」の一翼を担う

2、儀礼の重要性

意外と大事な儀礼

節目と通過儀礼（つうかぎれい）

- 人間は、本来連続体である自然に名前を付けて区切り、寄せ集めたり関連づけたりして世界を秩序づけている。そのような人工的な境界部分＝節目には必ずどっちつかずな部分がある。
- あいまいさは不安を引き起こしたり、秩序をおびやかすものとして避けられる。

例) 高校生でも大学生でない時期

子どもでも大人でもない時期

→入学式や成人式を行うことで「大学生」「成人」としての役割を担うことになる

⇒通過儀礼

社会的カテゴリーと役割

胎児→幼児→子供→青年→成人→未婚者→既婚者→壮年→中年→老人→死者

⇒通過儀礼を経ながら、社会の中のカテゴリーに沿った役割を期待される

参考文献：ファン・ヘネップ、アルノルト『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳 弘文堂 1995年

リーチ,E.R.『文化とコミュニケーションー構造人類学入門』青木保・宮坂敬造訳 紀伊国屋書店 1981年

儀礼はとても大事

究極にあいまいな死者

脳機能や心停止といった生物学的な死とともに、人間の存在が消えてなくなるわけではない。
人間は少しずつ死んでいく。＝「社会的な死」

→葬儀などの死者儀礼＝最後の通過儀礼

祖先祭祀（そせんさいし）

- ・ 社会的な死によって死者は完全に生者と切り離されるわけではない。
- ・ 「祖先」として何かしらの影響を「子孫」に与える存在として祀られる。
- ・ 祭祀＝祖先を祀ることによって、より幸せな生活を送るため、または不幸に見舞われないために不可欠であると考える。

例) 墓祭祀、位牌祭祀、祖先を祀る祠堂の祭祀、祖先に関わりのある場所での祭祀、・・・

⇒死者たちと関わりながらわたしたちは生きている

3、いいお墓を探して

(1) お墓の引っ越し[越智2018]

事例1) 沖縄の場合

Aさん:1950年代生まれ。沖縄県の離島出身。
高校進学で島を離れ、以降、両親と離れて
那覇で暮らす。

長男であるため、墓や位牌の祭祀を継承する。

「お墓や仏壇が遠いと大変だから引っ越し」



お墓や仏壇が遠いとなぜ「大変」？

沖縄における年中行事暦（1-8月）と祖先祭祀のつながり

行事	内容
旧正月	若水を仏壇に供える
一六日	あの世の正月。墓前祭を行う。
生年祝	干支の祝い。仏前で祝う。
彼岸	先祖供養。仏壇にご馳走を供える。
三月ウマチー	麦の収穫祭。宗家の仏壇を拝む。
清明祭	先祖供養の行事。墓参りをしてお重を供える。
七夕	墓掃除を行う。かつては洗骨を行った。
旧盆	7月13日迎え、15日送り
トーカチ	米寿の祝い。仏前で。
十五夜	仏壇にフチャギ餅を供える。



⇒祭祀を滞りなく行うことで安寧を得る

冷蔵庫に貼られた行事カレンダー

墓と故郷とのつながり

墓の引っ越しをめぐる葛藤（かっとう）

Aさん「（墓を移して）これから島の人間といえるかどうか。島の土に返るという基本から抜けてしまう」

Bさん「墓まで移してしまうと島と途切れそうという心配がある。本籍地も離島においてある。（本籍を記載した書類が時々必要だが）島の人間だという証明を残したかった。墓も同じだ」

「（離島の墓は）お祖父さんが棍棒一本で掘った。墓は海のそばのイメージ。（本島では）墓の地図を書かんとわからんような同じ墓が並んでいる」

⇒早ければ高校から島を出て生活し、同級生の多くが、島の外で職に就き、結婚。自分たちの子供世代は本島生まれ。せめてお墓を通じて島とのつながりを持ちたいが、親世代の希望から、やがて墓の移動へと至る。

3、いいお墓を探して

(2) 都市の樹木葬

事例2) 東京都の場合

郊外にある交通の不便な集合墓地より駅近の墓地
塔式の墓より庭園型墓地への人気が高まりつつある
→東京都港区にあるD寺（江戸時代に開基）と
そこで庭園型墓地を開発する業者への調査

「樹木葬」の増加は何を示すのか

現代日本の墓地での慰霊形態の変化[藤井2003]

寺壇関係→民間霊園へ

塔式→横型

刻字〇〇家→「寂・愛・眠・心・憩」抽象文字化

墓：先祖代々の霊の休まる場所→自己の死後の住処と考え、生き様を刻み、子供とのつながりを志向している。

⇒近年増加する「樹木葬」は何を志向しているのか

誰が墓をつくるのか

開発業者：

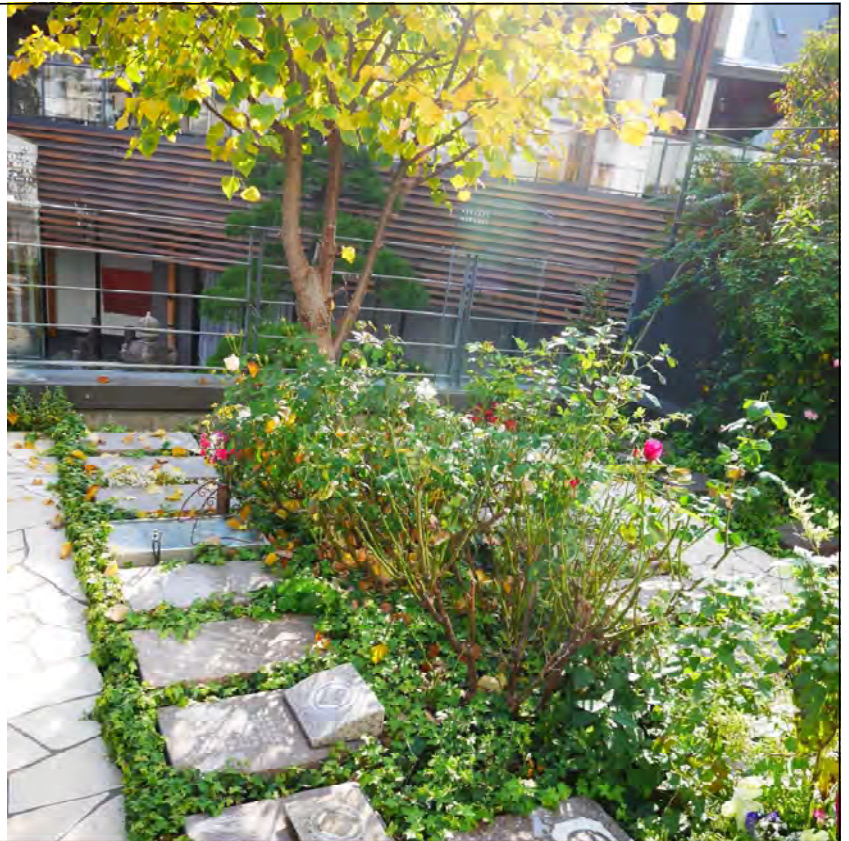
「見学者が庭を見て『樹木葬みたいです
ね』と言ったので、それから『樹木葬』
として売り出すことになった」「以降、
パンフレットにも『樹木葬』と明記して
いる」

女性に人気：

- 横型プレート、庭園、戒名ではなく
俗名記載

→開発業者

「（購入者は）友人がお参りに来やす
い墓にしたいと言っている」



現代のお墓選び

事例2) 東京都港区D寺庭園型墓地の場合

- 生前契約で入る人数を決める

→あらかじめ誰が入るか決まっているから大きな墓を作る必要がない

- 死後、生前契約で決められた年数が過ぎたら寺が祭祀をしてくれる

→後継の必要がない

- 庭園がキレイ、友人がお参りに来やすい

→マンションや家を買う基準と似ている

⇨現代社会の生活、家族構成、価値観が反映された墓選び

⇨仏教寺院での祭祀、石の墓碑は踏襲される

4、あの世の家、この世の家

現代のお墓選びにみる死生観

沖縄にせよ、東京にせよ、現在を生きる人々の生活、住まいの価値観が墓にも反映されている。

仏壇と違って、墓には創造性が発揮される余地が大きい。墓を作る過程、また出来上がった墓というモノを通じて、現在を生きる人々の「記憶」が墓に表現される。